

Title	切支丹大名記(シュタイシエン著, 吉田小五郎譯, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.164(696)- 165(697)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とする者には、いろ／＼の難關がつけまそう。曰く、國史の智識、曰く、カトリック教に關する理解、曰く、數ヶ國語に涉る語學知識の必要等に。就中直接誰もが感ずるのは語學知識の難關であらう。語學の事でまご／＼してゐると目ざす島に行きつかぬ中に溺れてしまふ。それで多くの人には根本史料に遡る事をせずして、英、獨、佛等、比較的手近なもので間に合せる安易な方法を選ぶ。併し、當底之で満足すべきではない。如何に勞多くともいづれ必ず根本史料まで遡らねばならぬ事論を俟たない。而も最近その趨勢にある。

著者岡本氏のいはれるが如く、ポルトガルは、『底の見えぬ井戸に汲んでも汲んでも残つてゐる水のやうに暫くは盡きない史界の寶庫を存する國』であり、近來漸く我國人の注意もこの方に向ひ、いづれは、日本に關する史料は何かの形にして將來さるべきであらう。(その一部は無論既に將來されてゐやう)。史料はさもすれば散逸し易いものである。史料の探訪は一日早ければ、一日の徳ありと聞く。この意味に於て岡本氏が、在葡日本關係文書の詳細なる目録をつくつて報告せられた事は、この方面に關心を持つもの、大いに悦びまするところである。更に岡本氏が、それらの史料を驅使しての研究を鶴首してまつものである。(吉田小五郎)

## 切支丹大名記

シユタイシエン著  
吉田小五郎譯  
大岡山書店發行

シユカエル・シユタイシエン師の「切支丹大名」は、すでに一九〇三年(明治卅六年)に、英文を以て、更に翌年、佛文を以て改正増補

版を刊行され、名著として廣く知られてゐるものである。吉田氏のこの翻譯は、佛文に依たものである。

本書はその別名に、「日本の政治・宗教史上の一世紀(一五四九—一六五〇年)」とあるを以ても分る如く、天文より慶安に至る百年間、即ち、切支丹の傳播よりその根絶に至るまでを取扱つてゐるものであつて、國史上より見ても、最も波瀾に富んだ時代である。師が本書を著すにあたつて、その史料として用ひたものは、當時に布教した宣教師等の書翰であつて、師はこの大部分を東京帝國大學圖書館、上海の耶蘇會圖書館、ナザレ(香港)の外國宣教會の圖書館で見、其他はマカオの文書館と、日本の教會より借覽したと言ふ。我々は足利末期、織田時代、豊臣時代、徳川初期に關して、當時の宣教師の報告や書翰から、我國の記録に残つてゐない、當時の社會狀態や政治狀態を知ることが極めて多いのである。従つて此等の所謂西洋側の史料を根據とした本書が如何なる價值を有するかは言ふまでもない。

師はその序文に於て、

「勿論、本書に於て總ての事が新しくはない。記述せる事實の大部分は、日本の歴史を聊かでも研究した人には、既に知れてゐる事なのである。但し其特別な興味、其特色と言へば、日は猶淺しとはいへ、同じ事實を其真相に於て説き、時には之までの一般の説とは全然相反して説いた所さへある、それでかくて若干の國民的英雄は際ごいまでに其光輝を失ひ、幾多の勝利も裏切りや背誓に汚されてゐる。」

と言つてゐる。事實、師の言ふ如く、本書の中に於ては、從來

の歴史さかなり異なつた、或は全く反對の事件の見方や人物観は、到る所に見受けられるのである。此等は何れも我々にまつては、非常に参考となるものであつて、總てを宗教的な偏見に依る觀察として棄て去るべきものではない。然し師の見解が、何れも正しいものであるとは思はれない、事件の記述にしても、人物の批評にしても、正鵠を失すると思ふ點も存するのである。本書に於て立派な武士とされ、又は大名とされてゐる人々を見るに、それ等は何れも切支丹宗徒であつて、この宗派に反對した人物は、卑怯、狡猾、冷酷などの言葉を以て批評されてゐることだけを見ても、この事は分ると思ふ。然し師がこの様な態度を取るに至つたことも、決して無理ではない、師は歴史家としてではなく、宣教師としての立場より本書を書いたものであらうと思はれるからである。歴史家に對してすら、絶體公平の立場を要求することは、無理であり、無意味である。況んや、師に對してこの態度を求めるときは不可能であらう。要するに、本書は宗教家としての立場より書かれたものであるけれども、それだけに、その叙述に情熱があふれ、その文章に魅力があり、普通の史籍には、當底見ることの出来ない面白さを有するものである。

譯者吉田小五郎氏は、本塾史學科出身の少壯學者であつて、切支丹研究を専攻されてゐる。本書を通讀しても、氏が非常なる熱心と眞剣さを以て、この翻譯をなされたものであることは知られるのである。その譯語の正確さや、撰擇に注意された點に於ても、その文章の流麗なる點に於ても、他の翻譯書に於ては見ることの出来ないものがある。特に人名、地名に正字を當て候めら

れた苦心、又は、一々原書の誤謬を正されて、私註を加へられた點など、氏の熱心さを以て初て爲し得るものであり、非常な苦心を拂はれた事が分る。更に全部陽曆に陰曆を加へられた事や、シユタイシエン師の小傳とその著作目録を初に加へ、精密な索引を附せられた等は、讀者には非常に便利である。而して最後に氏の秘藏の切支丹關係の珍らしい圖版二十二枚を附録とされてゐるのは更に讀者を喜ばすものであらう。吉田氏の苦心と熱心になるこの翻譯は、原書に一層の正確さと、面白さと、價值を加へたものであつて、名は翻譯であるが實際はそれ以上のものである。吉田氏は、目下パジエスの「日本切支丹史」の翻譯に従事されつゝ、あるこの事である、一日も早く完成せられんことを望む。

(今宮新)

## 彙報

### 鹽山甲府地方見學旅行記

昭和四年十一月九日(土曜日) 午前七時三十分新宿驛發、鹽山甲府地方見學の途に登る。教授學生併せて一行七名。空は曇なれども、時々雲の切れ間より紺碧の秋空を見る。吾等の列車の武藏野を過ぎ、高尾、笹子の山峽に進み入る頃には兩窓の秋色漸く濃やかなり。當初の計畫にては鹽山迄直行する豫定なりしも、俄かに豫定の一部を變更して十一時半初鹿野に下車す。此處より北方